

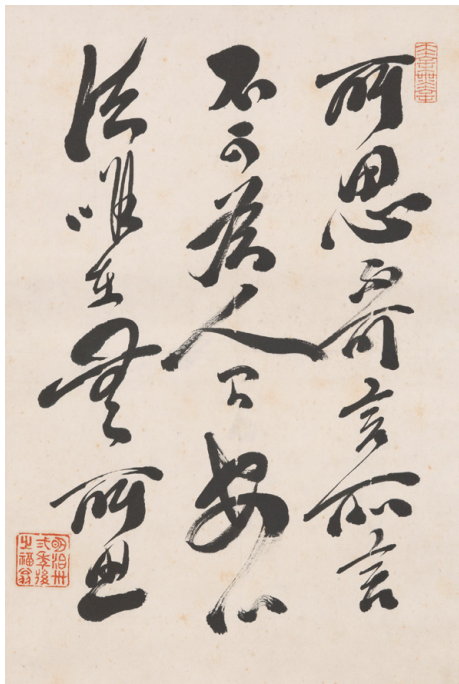
福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第20号 2014年3月31日 発行

目次

* 福沢大四郎旧蔵 福沢諭吉漢詩遺墨 …………… 1	* 主な動き…………… 5
* 福沢研究センター公開講座（坂上弘氏）…………… 2・3	* 新収資料紹介…………… 6
* シンポジウム「明治期における中等教育の展開 — 接続問題を考える —」～2013年11月29日開催～ …… 4・5	* センター諸記録（2013年10月～2014年3月） …… 7
	* スタッフ一覧…………… 8



福沢大四郎旧蔵 福沢諭吉漢詩遺墨

【潮田洋一氏寄贈】

「所思不可言 所言不可為 人間安心法 唯在無所思」

* 思うところは言うべからず 言うところ為すべからず

人間安心の法は ただ思うところ無きに在り

* 思ったことをすべて言うことはできない。言ったことをすべて
実行することもできない。この世の中を安心して暮らす方法は、
何も思わないことだ。 読み下しおよび訳：金文京氏

『福沢諭吉事典』（慶應義塾 2010年）705頁

* 関防印（右肩に押し、書き始めを示す印）は「大幸無幸」。左下の
落款の位置には「明治卅貳年後之福翁」。同印は脳溢血から
回復したのちの書幅に、遊印として押されることが多い。



義塾・文学・ちょっぴり福沢

坂 上 弘

1. 文学部に入学して日吉に通いはじめた昭和29年頃は進駐軍のカマボコ宿舎が教室や食堂に使われていた。新入生に配られた「福翁自伝」について二年先輩で同じ高校からきて英文科に進んでいた江頭淳夫（のちの江藤淳）が福沢の文体が勝れていることを力説していた。江藤は雄弁術を学んでいて福沢の文体にほれこんでいた。私は後に江藤と「三田文学」の先輩のもとへめぐりこむことになるが、福沢に関心をもったのは、卒業してからで、それも小林秀雄の「福沢論吉」（昭和36年）を読んで福沢の中に坐している人間観の指摘にひどく打たれたときだ。文学をやるものにとって人間観は必須で、それを東洋に求めるか西洋に求めるかは文学作品を読んで自分で決めねばならない。私は文学青年であり、岐路に立ちながら、アメリカ南部文学の敗北を経験した社会の人間観に惹かれていた。日本の敗戦と類似していると嗅ぎとったと言った方がよからう。それを、すでに、日本の明治社会に、濃密な人間像たちが近代化をすすめるにあたって、その人間をどのように文学的に腑分けしていたかを福沢の中に発見しているのが、小林秀雄である。小林秀雄が、「福沢論吉」の中でとりあげていることは、日本の将来は洋学しかないのだが、実践的思想家である福沢がいかに日本の困難を生きるかに自らの思想をかためていたか、その姿を絶賛しているのである。文学者がなぜ福沢を認めるのか。それは、福沢の言葉のとらえる人間像、それこそを、福沢の行動の実体と観たからである。小林は福沢の「学問のすゝめ」第十三編をとり出して次のように解してみせる。『「怨望の人間に害あるを論ず」という一章があるが、福沢の鋭い分析的な観察力がよく現れている。人間品性の不徳を語る言葉の種類は、実に沢山あるが、その内容をなす人心の動きに着目すれば、その強弱、方向に由って、間髪を容れず、徳を語る言葉に転ずる。例えば、「驕傲」は「勇敢」に、「粗野」は「率直」に、「固陋」は「実着」に、「浮薄」は「穎敏」に、という具合に切りがない。ところが、絶対に不徳を現わして、徳には転じないものが一つある。それが、「怨望」という言葉である。（中略）実に「怨望は衆悪の母」であり、その「働の素質に於て全く不徳の一方に偏し、場所にも方向にも拘はらずして不善の不善なる者」と福沢は

主張する。』（後略）「怨望」は、自ら顧み、自ら進んで取るということがない。自発性をまるで失って生きて行く人間の働きは、「働の陰なるもの」であって、そういう人間の心事は、内には私語となつてあらわれ、外には徒党となつて現れる他に、現れようがない。怨望家の不平は、満たされる機がない。自発性を失った心の空洞を満たすものは不平しかないし、不平を満足させるには自発性が要るからだ。』

おおよそこういうふうには、小林秀雄が福沢をいかに日本の思想を改革牽引するに偉大な、平易と気品と苦悩をもっていた実践家であったかを論じているのを知ったのが、私の社会人になった頃の認識の出発点にあったわけで、その後ずっと、福沢を読むときの指針となった。

2. さて私はこのように学生の頃福沢のことは殆ど学ばずに「三田文学」の先輩たちの膝下で育った。「三田文学」がどこかで福沢につながるとは夢にも思わず、ただ「三田文学」に小説を書くようになり、文学の中に引きこまれて行った。大学二年生のとき「三田文学」編集部の山川方夫から一枚の葉書が届き、君の同人誌に書いた文章を読んだが会いにこないかというものだった。これがきっかけで私は「三田文学」の創作特集に第一作を載せた。それが芥川賞候補になり編集委員である先輩文学者たちにお目にかかった。銀座はせ川の二階が編集会議の席で、内村直也、北原武夫、佐藤朔、戸板康二、丸岡明、村野四郎、山本健吉という7人の侍といわれていた大先輩だった。ここから話せば長くなり過ぎるので事実を簡単に述べるが、最初から先輩文学者たちに傲岸排他は露ほどもなく、文学は人を拒まないものという共和的精神がみなぎっていた。勿論学生の年齢で文士の苦勞に無智だったせいもあるが、そこには眞実、怨望というものが一切はたらくことはなかった。

「三田文学」は明治43年、福沢没後10年経った頃慶應義塾文学部の旗印として創刊された。くわしい経緯ははぶくが、編集発行人に永井壯吉（荷風）を招き義塾の文学部の発展姿勢を文壇に示す文芸誌として出発した。創刊までに義塾の中で骨を折ったのは、森鷗外、石田新太郎、上田敏である。

そして創刊から一年を経ずして登場するのが、久保田

万太郎、水上瀧太郎、佐藤春夫といった学生の書き手であった。又、主な書き手には森鷗外、永井荷風、与謝野晶子、谷崎潤一郎、芥川龍之介、野口米次郎、小山内薫、上田敏、堀口大学、馬場孤蝶とあげれば、三田文学の陣容が充実している様が目にうかぶであろう。2010年に創刊百年を迎え展覧会や講演会が行われたのが記憶に新しいが、ここでは学生諸君にこの「三田文学」が福沢精神とどのようにつながっているかを推理していただきたい。

私の学生時代に出会った「三田文学」は、文学は人を拒まないという本質を伝承してくれるものであったが、荷風創刊時代のあと、水上瀧太郎時代があり、太平洋戦争の敗戦後からは5回の休刊を数えてる。が、「三田文学」らしさが消えることなく続いている。

この百年の歴史を通して見られるのは、新人登場、学塾にとらわれない公器であること、という自由で異端の方針である。近代日本文学の一翼を荷う姿は、あたかも「怨望」を排する人間の姿を説く福沢精神を描こうとしていることになるのではないかと推理してほしい。

「三田文学」が荷風の手を離れた後、方向を見失ったときに、文学の意義を信じて再興に手を染めたのは水上瀧太郎である。その水上に、「三田文学は福沢先生の為のこした仕事だと思う」という言葉がある。「三田文学は福沢先生の為のこした仕事」それは何の意図もない呟きのような一文であった。瀧太郎は福沢の高弟の一人阿部泰蔵の子息でむしろ福沢に反撥して育った少年時代もある人だが、瀧太郎の文学の本質は、「怨望」を排する福沢の社会改革に苦悩する生き方を感得していたと思う。これは、業半ばにして倒れた水上瀧太郎を研究する人が学生諸君の中からあらわれてくださることを願って申し上げることである。

世界は広く、社会は複雑に変化しているなかで共存という運命を果すには「怨望」を排することが唯一の指針といってよいのではないだろうか。

3. 戦後の「三田文学」は昭和21年(1946)から復刊され、原民喜や、堀田善衛、山本健吉、柴田錬三郎、石坂洋次郎といった新しい書き手が登場する。これを戦後第1次とよんでいるが、第2次には安岡章太郎、曾野綾子が続き、松本清張の「或る小倉日記伝」が芥川賞を受賞する。この第2次が少しの間休刊して、第3次の「三田文学」の発刊を引き受けたのが桂芳久、田久保英夫、山川方夫

の3名で、3人ともまだ大学院生だった。3人は、事務所探しも広告取りも、義塾からの支援関係もすべて自らの手で整え、先にのべたように編集委員に7名の大先輩の三田派を依頼するいわば独自の編集をするにあたっての防波堤の布陣を引いた。

私は3人の若手の側から書いているが、その気概と計画性と実務性はじつに小気味よい。

最後に資金の準備のために紹介状をもって藤原銀次郎のところへ山川が行き、藤原翁から有意義な文学雑誌発行とはいえ利潤の上らない計画には出資できないと断られ、感服している。しかし山川は三田の先輩である王子製紙の阿部芳郎を訪ね、出資してもらおう。返済計画つきだったという。この阿部芳郎が阿部章蔵(水上瀧太郎)の末弟であることはよく知られている。

つまり戦後10年経って新人の旗を掲げるにあたって若い三人の大学院生は義塾社中の間をかけまわって復刊を実現したのである。三人の編集方針は、公器、独立採算、新人発掘だった。独立採算なら流行作家の支援を仰ぐことはない。七人の侍を編集委員に擁して防波堤になってもらえば企画や作品の評価に横槍は入らない。そして敗戦後10年に新しい力を発揮しはじめた小説、詩、批評、評論、演劇、外国文学の分野の20代の書き手に、それぞれの第1作を書かせることができる。このような方針をもったのも、三人が文壇をよく見ていたからであるが、それを喜んで支援し実現させたのは、三田の先輩たちである。

当時私自身はまだ「社中」という言葉すら知らなかったが、編集の下働きをさせてもらいながら、「三田文学」の文人氣質を直に学ぶことになった。例えば、安岡章太郎さんのところへ初めて原稿を受け取りに行ったとき、私が「安岡先生…」と喋り出すと、「そのせんせいは、やめよう」と教えてくれた。それ以来、三田の文人を一度も先生よばわりしたことがない。

思えば、私にとって自由でしなやかな山川、桂、田久保の存在が、慶應義塾に入学していただいた最大の贈物だった。この三人は水上瀧太郎、折口信夫、西脇順三郎を学びつつ、越えようとしていた。やがて桂は北里大学教養部長に、田久保は芥川賞作家になった。一番生まれながらの小説家だった山川は、交通禍で34歳で早逝し、来年は没後50年になる。

明治期における中等教育の展開

—— 接続問題を考える ——

2013年11月29日（金曜日）、三田キャンパス東館8階会議室において、明治期の中等教育に着目したシンポジウムを開催した。日本の近代化推進は、担い手となる人材をいかに育成できるかにかかっており、特に中等教育・高等教育が果たした役割は大きいと言える。そのなかで、明治期の中等教育をめぐるのは、2つの接続問題が存在する。ひとつは近世の教育が、前近代から近代へと変化していく世相のなかで、どのように近代の中等教育と結びついていったかという視点であり、もうひとつは中等教育から高等教育への接続である。

本シンポジウムでは、最初に新谷恭明先生に教育史の観点から、近世の藩校から明治期の中学校へという中等教育の流れと、明治期における中等教育から高等教育への流れについてご報告いただき、続いて伊藤彌彦先生から英学校として始まった同志社の事例を、真辺将之先生から東京専門学校として開校した早稲田の事例をご報告いただいた。その後、当福沢研究センター所員米山光儀慶應義塾大学教職課程センター教授のコメント、およびフロアを交えての全体討論を行った。

■ 明治期の中等教育に於ける二つの接続

新 谷 恭 明

（九州大学基幹教育院 教授）

教育理念ではなく現状をみれば、近世においては初等・中等・高等教育の区別があったわけではなく、近世までの教育体制と近代以降の教育体制を接続させることは困難で、初めから合わないものをどのように整合させていくかという課題であった。学校史をみると、同じような出発点であっても、藩校からの繋がりを重視している学校と、そうではない学校がある。廃藩置県で廃止になるので、一度途切れているのは間違いないが、空白の長短に関わらず継続性を謳う場合がある。ただ藩校には時務の認識があったが、明治期の中学校は「真の時勢の認識」を欠くが故に「真の時務実行の教育」たりえず、あたかも騎手を失った馬が疾走を続けようというのに似ていた。修猷館をはじめとする九州の例では、尋常中学校を作る際に、かつて藩校が作ろうとしたその地方の指導者を作るという意識は見られる。

また中等教育と高等教育の接続をみれば、接続が前提でありながら、東京大学予備門の例のように大きな水準

の違いがあり、地方の中等教育と高等教育を結ぶバイパスの学校が作られるようになる。旧制の高等学校ができるようになってようやく繋がり、そこまで接続には時間が掛ったといえる。また学年暦が統一されていないことも大きな要因であった。大正七年以降にようやく整っていくことになる。

■ 中等教育としての同志社英学校

伊 藤 彌 彦

（同志社大学 名誉教授）

同志社英学校は明治8年に開校し、翌年には女子教育も萌芽した。「英学」の看板は高等教育進学を目論む青年を集める力があり、他方、所謂「熊本バンド」の転入は、中等教育と高等教育の混在する宗教学校の性格を形成した。新島襄と徳富蘇峰の手で文章化された同志社建学の精神は、同志社を民間資金の寄附に基づく私学として、自己の子弟を自分で教育する機関、自立的で堅実な中等社会の担い手を育成する目標を謳っていた。キリスト教主義と自主自立人養成の文言は官学との違いを明確にした。しかし開校から明治24年の間の退学者率は83.3%と高い。これは時代が、学歴主義ではなく学力主義の時代であったことによるが、慶應義塾同様、学校と現実社会とのミスマッチの問題が作用していた。

そもそも「中等教育」は明治期に導入された概念であり、日本の中等学校は、中等社会向けの人材養成をする完成教育機関なのか、高等教育への準備教育機関なのかで揺れてつづけてきた。『学問のすゝめ』や『西国立志編』を読み、能力主義による人生開拓を夢みた青年の、地方から都会へ、下層から上層への社会移動が広がった。しかし、中等教育はおろか、日清戦争が終わるまでは小学校教育修了者さえ、その成果を十分生かしきれない社会があった。戦前日本における経済成長は、今日の途上国のように、格差社会を拡大させていたから、中等教育と社会との整合性には構造的矛盾があった。

ただ英国のパブリックスクールや独逸のギムナジウムのような閉鎖的特権階級型（複線型学校制度）学校に較べて、日本の中等教育制度は、開放的機会均等型であった。これは公正な競争による能力開発と専門家養成において優れていたが、人格養成教育機関としては劣っていた。

■ 東京専門学校と接続問題

真 辺 将 之

(早稲田大学文学学術院 准教授)

東京専門学校は明治15年の開校で、近世との接続ではなく、明治初期の洋学塾との接続が問題であった。10年代になると、洋学塾は政治学、経済学、法律学など特化した学問を学ぶ学校になる。東京専門学校は「学問の独立」をめざした。それは西洋の学問からの独立であり、あらゆる政治権力からの独立である。前者の実現として、日本語による速成教授が行われた。

当初は中学校制度が整備途上であったことから、入学者に前提知識を求めることはせず、授業形式は口述筆記であった。明治20年度から尋常中学校卒業証書を有する者が入学要件になり、翌年度は入学年齢を17歳に改めて、特に高等小学校卒業者の英語力不足を補足することを目的として予科を設けた。同時に英語政治科、英語法律科、英語行政科を設置し、大学に近づけることが試みられ、邦語速成教授という売りとの間に二律背反が生じた。また実力のある学生を集めるのは難しかった。30年以降は資本主義の発展や中学校の増加で、学生数は増加の一途をたどり、31年には独立した学問でも英語は必

要であると高等予科を新設した。明治35年には早稲田大学と改称し、「中学と直接連絡」した邦語教育のみの専門部と、高等予科から大学部へという二本立ての仕組みが構想された。

またもう一つの接続として、巡回講義や講義録の出版を行った。これらは早稲田の庶民的イメージの形成に大きく寄与している。多様な学歴に対する単線的ではないカリキュラムの準備も含め、一口に東京専門学校と言っても、状況に応じた様々な学び方が可能であり、それが早稲田の学風「自由と多様性」とも関連づけられる。



(文責 伊藤彌彦・西沢直子)

主な動き

■ 大阪での福沢研究センター講座

福島から梅田に移転、名称も改まった大阪シティキャンパスにおいて、今年度もセンター講座を開講した。「新・福沢諭吉論—諭吉の目から見た近代日本—」というテーマで5回にわたる講義を行った。講義名と担当は以下のとおり。10月26日(土)：福沢諭吉の士族観と家族論(西沢直子)、12月21日(土)：福沢諭吉にとっての政治と外交(都倉武之)、1月18日(土)：福沢諭吉および門下生と近代日本の企業経営(平野隆)、2月1日(土)：近代教育制度の成立・展開と福沢諭吉(米山光儀)、3月8日(土)：福沢諭吉と法文化(岩谷十郎)。

■ セミナーの開催

1月14日(火)、三田キャンパス東館において秋学期セミナーを開催した。京都大学教授小倉紀蔵氏をお招きし、ご著書『朱子学化する日本近代』をベースに日本の近代化と儒教を考える研究会を開催した。はじめに小倉教授から著作について報告をいただき、次いで韓国延世大学の高熙卓先生からコメントをいただき、その後活発な議論が展開された。

■ 韓国からの研修生を受入れ

2月1日から3月31日までの2ヶ月間、准訪問研究員として韓国延世大学から蔡 貫植氏を、また、2月2日から16日まで梨花女子大学から文 智炫氏、梁 熙晶氏、咸 藝在氏の3名を受け入れた。

■ 『近代日本研究』第30巻の発行

2月28日に紀要『近代日本研究』第30巻を発行した。2013年は福沢研究センター開設30年にあたることから、特集「慶應義塾福沢研究センター開設30年」を組んだ。歴代所長による座談会を企画、センターのこれまでの歩みを振り返るとともに、今後についての展望が語られた。

■ 「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト企画

3月11日(火)に白井厚名誉教授をお招きして、三田研究室棟において「共同研究「太平洋戦争と慶應義塾」とは」と題する講演をお願いした。同氏は太平洋戦争と大学に関する記録を多数公刊、2007年には福沢研究センター資料(11)として『アジア太平洋戦争における慶應義塾関係戦没者名簿』を編集・刊行している。

■ BDKE 作業部会との共催による研究会

3月12日(水)、研究室棟A会議室において慶應義塾経済学者人物データベース(Bibliographical Database of Keio Economists:BDKE)作業部会との共催で研究会を開催した。

■ ワークショップの開催

3月20日(木)、「福沢諭吉訳『増訂華英通語』の書誌と原本について」というテーマで国際基督教大学アジア文化研究所客員所員の飛田良文氏によるワークショップを開催した。同氏がこれまで調査してきた原本の書誌学的な相違について中間報告をしていただいた。

❖ 新収資料紹介

平成25年9月から平成26年2月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。(物故者敬称略)

潮田家関係資料

【潮田洋一氏寄贈】

福沢諭吉の曾孫で、五女みつ(光)の孫にあたられる潮田洋一氏より、福沢諭吉関係資料6点が寄贈された。主な資料は以下の通りである。

■ 潮田伝五郎宛福沢諭吉書簡 明治30(1897)年2月10日付 1巻

みつと潮田伝五郎は、明治29年7月に結婚した。潮田は芝浦三井製作所の技師で、その母は東京婦人矯風会の設立に尽力し、足尾鉍毒地救済婦人会の会長、日本基督教婦人矯風会二代目会頭も務めた潮田千勢子である。

この書簡は、潮田伝五郎がサンフランシスコに無事到着したことを喜び、母千勢子の病状を知らせるとともに、三井のなかに不賛成の声も多いので、みつの渡米は見合わせる指示を出すように希望したもの。

■ 潮田みつ宛時事新報貸金譲渡書 明治31(1898)年1月付 1通

福沢諭吉から時事新報社への貸金のうち1万円をみつに譲渡し、その利息として年利7%、また入用があれば、元金も受け取ることができる」と記された覚書。

■ 伊藤博文宛福沢諭吉書簡 明治12(1879)年4月8日付 1巻(他の資料と合装)

昨朝の参上について謝辞を述べ、経営難を迎えていた慶應義塾の維持資金の借用について、要点を記して賛成を願ったもの。再出願書を東京府知事(楠本正隆)まで提出したので、今日明日中には内務卿(伊藤博文)および大蔵卿(大隈重信)へ差し出されると思われ、最初の内務省で門前払いにならぬよう「御賛成」を依頼している。

■ 『福翁百話』草稿 七 1巻

『福翁百話』は明治29年3月1日から30年7月4日まで『時事新報』に掲載され、同月に単行本として刊行された。原稿は10本の卷子に仕立てられ、9人の子どもが1本ずつ(長男のみ2本)所持した。

桜井恒次郎関係資料

【櫻井順氏寄贈】

櫻井順氏からはすでに小幡篤次郎の書簡や遺墨の書幅など貴重な資料をご寄贈いただいている。今回も桜井恒次郎に関する資料のほか、明治維新以前の小幡甚三郎の書簡や小幡篤次郎の俳句短冊など小幡兄弟に関する資料も寄贈を受けた。桜井恒次郎と小幡篤次郎は、恒次郎母たけと篤次郎父篤蔵が妹兄で、いとこ同士になる。

桜井恒次郎は、中津の出身で慶応2(1866)年3月に慶應義塾に入学した。明治5年頃から慶應義塾出版局の事務を担当し、横浜の丸屋に加わった。その後丸屋から独立して、横浜で茶商を営み、横浜正金銀行設立時には副支配人として参画、長く同行に勤務した。24年3月頃の同行退職後、京都市上京区に住んで酒造業を始め、明治26年には「御手製」の酒を1樽福沢に贈っている。

■ 桜井恒次郎家禄奉還願 明治8(1875)年3月9日付 1通

中津藩は明治改元後士族たちに帰農商を勧め、一番初めに応じて帰農の申請をした人物は桜井であった。このとき中津藩が提示した条件は、帰農あるいは帰商を行う士族に対して50両、卒族に対して25両、加えてそれぞれの禄高5か年分を支給するというものであった。しかし廃藩置県後4か月で中津県から小倉県に変わってしまった関係で、士族中37名へは約束した50両がはらえず、また全員に5年分の禄高支給を行うことができなかった。結局明治8年1月になると、85名が復籍となった。

この書類は、桜井恒次郎から小倉県権令小幡高政に提出されたもので、家禄を奉還し商業に従事するための資金の下付を願ったもの。小倉県側からの回答は赤字で書き込まれ、八年四月四日付けで「願之通聞届 追而資本金可下渡候事」とある。

■ 桜井信四郎宛福沢諭吉書簡 明治28(1895)年7月9日付 1通

恒次郎の逝去に対する悔み状。信四郎は恒次郎の長男で明治12年に生まれ、20年1月に慶應義塾幼稚舎に入学した。父恒次郎歿後は小幡篤次郎が保証人になっている。のち篤次郎娘静と結婚。

■ 小幡篤次郎短冊 4枚

次女えいおよび三女静の結婚に際し詠んだものと、自らの戒名を記し後のことを2人の婿に託したもの。鈴木恒三郎の父閑雲も旧中津藩上士で、福沢とも親交が深かった。

■ 諸会議

- *平成25年度第3回執行委員会(10月28日)
- *平成25年度第4回執行委員会(1月7日)
- *平成25年度第5回執行委員会(2月4日)
- *平成25年度第6回執行委員会(2月25日)
- *平成25年度第2回運営委員会(11月7日)
- *平成25年度第3回運営委員会(3月7日)
- *平成25年度第2回センター会議(12月13日)
- *小泉基金運営委員会(1月21日)
- *『近代日本研究』第31巻編集委員会(3月17日)

■ 人事

- 〈研究嘱託〉 新任 平山 勉(経済学部訪問准教授) 2013年10月1日～2014年3月31日
- 〈事務局〉 新任 印東 史子(事務嘱託) 10月1日～
新任 高田真規子(派遣職員) 10月1日～

■ 主な来住

以下、戦争プロジェクトに関連する聞き取り調査には(聞)を付す。

- *日比野秀治氏来訪(聞)(10月9日)
- *佐々田良二氏来訪(聞)(10月11日)
- *万延元年遣米使節子孫の会宮原万里子氏、村垣孝氏来訪(10月15日)
- *住吉神社権禰宜柴田良一氏来訪(11月13日)
- *塾員大村鯨太郎氏来訪(聞)(11月14日)
- *潮田峻二氏来訪、福沢資料を寄贈(11月15日)
- *韓国女性史学会より見学者5名来訪(11月18日)
- *中村雪子氏、福井寿美子氏、日吉に来訪(聞)(11月30日)
- *ベルランゲイ河野氏、資料閲覧のため来訪(12月2～3日)
- *石垣貴千代氏来訪(12月5日)
- *福島秀男氏来訪(聞)(12月6日)
- *長野から上原家関係者来訪(12月9日)
- *長澤剛正氏来訪(聞)(12月13日)
- *高橋よし子氏来訪(聞)(12月16日)
- *上松洋子氏来訪(聞)(12月20日)
- *金東明氏、資料閲覧のため来訪(12月26日)
- *内田駒子氏来訪(聞)(1月23日)
- *延世大学王賢鐘氏ほか来訪(2月4日)
- *中津旧邸保存会から浅原由紀子氏、吉川和彦氏来訪(3月18～19日)

■ 出張・見学

- *酒井事務長、清野主務、全国大学史資料協議会全国大会(明治大学)に出席(10月9～11日)
- *西沢、古文書講座、目録作成の打合せのため中津(10月16～17日)
- *都倉、多田幸子氏宅で資料調査(10月17日)
- *都倉ほか、熊谷眞氏を訪問(聞)(10月19日)
- *都倉ほか、木名瀬信也氏を訪問(聞)(10月19日)
- *都倉ほか、資料調査のため長野の上原家を訪問(10月22～24日、3月24～26日)
- *都倉ほか、資料閲覧のため幼稚園を訪問(10月25日)
- *都倉、塾員石沢幸一郎氏宅を訪問(聞)(10月31日)
- *都倉、慶應義塾ゆかりの地を巡る、大阪・京都ツアーにて徳島慶應倶楽部を案内(11月3日)
- *都倉ほか、京都の瀬川清氏宅訪問(聞)(11月4日)

- *西沢、都倉、堀調査員、中津にて福沢家目録について打合せ(11月11日)
- *都倉、浅沼幸一氏を訪問(聞)(11月13日)
- *都倉ほか、塾員須藤忠保氏宅を訪問(聞)(11月16日)
- *有末教授、中津弁論大会にて審査員(12月5～6日)
- *西沢、福沢家目録の件で中津(12月19～20日)
- *岩谷、西沢、韓国梨花女子大を訪問(1月16～18日)
- *都倉ほか、加藤利子氏を訪問(聞)(2月6～7日)
- *都倉ほか、札幌の塾員橋本嘉方氏、同百留次雄氏を訪問(聞)(2月9～11日)
- *都倉ほか、周南市回天記念館で資料調査。塾員柳井和臣氏、同田中四郎氏訪問(聞)(2月20～24日)
- *都倉、資料調査のため故本田直左衛門親英氏宅(3月13日)
- *都倉、高知在住の塾員吉村泰輔氏ほか2名を訪問(聞)(3月15～16日)
- *岩谷、西沢、中津旧邸保存会で会議(3月26日)
- *都倉、神奈川県立歴史博物館(3月27日)
- *都倉、東伏見の庄司悌二氏を訪問(聞)(3月31日)

■ 講師派遣

- *都倉、公認会計士三田会研修会にて講演：「慶應義塾の歴史を学ぶ一帳合之法から、学徒出陣、最後の早慶戦まで」(10月10日)
- *岩谷、福沢文明塾にて講義：「福沢の文明論—文明塾を象る四つのキーコンセプト」(10月12日)
- *都倉、島谷ゼミOB会にて講義：「ふだん着の福沢先生」(10月18日)
- *西沢、福沢文明塾にて講義：「家族とは何か—福沢諭吉の家族論」(10月19日)
- *都倉、国分寺三田会にて講演：「最後の早慶戦70年」(11月17日)
- *西沢、文学部総合講座「自然と文明」にて講義：「文明男女の交際とフリーラブ」(11月26日)
- *都倉、福沢文明塾にて講義：「慶應義塾と戦争」(11月28日)
- *西沢、世田谷市民大学にて講義：「近代日本と福沢諭吉—オルタナティブとしての福沢—福沢諭吉の家族論」(11月30日)
- *都倉、港北区ボランティアガイド養成講座にて講演：「慶應義塾大学と福沢諭吉」(12月4日)
- *都倉、世田谷市民大学にて講義：「福沢諭吉の政治思想」(12月7日)
- *西沢、小山市民講座：「福沢諭吉の女性論・男性論を考える」(12月8日)
- *西沢、SFC学部説明会(12月11日)
- *西沢、慶應さんかく会(通信教育部)で講演：「福沢諭吉と女性」(12月14日)
- *都倉、世田谷市民大学にて講義：「福沢諭吉の外交思想」(12月14日)
- *平野副所長、経営哲学学会にて講義：「福沢諭吉の経営思想」(12月14日)
- *西沢、福沢先生114回忌法要(中津)で記念講演：「家族とは何か」(2月3日)
- *西沢、姫路慶應倶楽部で講演：「初期慶應義塾に学んだ姫路ゆかりの人々」(2月5日)

■ 訃報

- *関西大学教授浜野潔氏(客員所員)逝去(12月23日)

スタッフ一覧

所 長	岩谷 十郎	法学部教授	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
副 所 長	平野 隆	商学部教授	進藤 咲子	東京女子大学名誉教授
専任所員	西澤 直子	副所長、福沢研究センター教授	曾野 洋	四天王寺大学教授
	都倉 武之	福沢研究センター准教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	田中 康雄	元群馬県立文書館館長
(兼運営委員)	小野 修三	商学部教授	西田 毅	同志社大学名誉教授
	小室 正紀	経済学部教授	平石 直昭	帝京大学教授
	澤田 達男	理工学部教授	平山 洋	静岡県立大学助教
	武林 亨	医学部教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
	林 温	文学部教授	前坊 洋	
	山内 慶太	看護医療学部教授	松沢 弘陽	
	米山 光儀	教職課程センター教授	松田宏一郎	立教大学教授
所 員	有末 賢	法学部教授	宮村 治雄	成蹊大学教授
	井奥 成彦	文学部教授	森川 英正	
	大久保忠宗	普通部教諭	山田 央子	青山学院大学教授
	太田 昭子	法学部教授	林 宗元	韓国関東大学校名誉教授
	大塚 彰	志木高等学校教諭	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	小川原正道	法学部教授	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学教授
	加藤 三明	幼稚舎長	Nguyen thi Hanh Thuc	
	Knaup, Hans-Joachim	経済学部教授		
	結城 大佑	女子高等学校教諭	研究嘱託	金 真琬
	末木 孝典	高等学校教諭		巫 碧秀
	Ballhatchet, Helen	経済学部教授		三島 憲之
	宮内 環	経済学部准教授		石井寿美世
				吉岡 拓
				平山 勉
顧 問	岩崎 弘	元幼稚園教諭		堀 和孝
	小泉 仰	名誉教授		坂井 博美
	坂井 達朗	同		山根 秋乃
	佐志 傳	元高等学校教諭		柄越 祥子
	寺崎 修	名誉教授		
	松崎 欣一	名誉教諭	事 務 局	酒井 明夫 事務長
				清野 早苗 主 務
客員所員	安西 敏三	甲南大学教授		池上 瑠菜 事務嘱託
	飯田 泰三	島根県立大学副学長		印東 史子 同
	井田 進也	大妻女子大学名誉教授		高田真規子 派遣職員
	區 建英	新潟国際情報大学教授		柄越 祥子 非常勤嘱託
	掛川トミ子	関西大学名誉教授		石崎 亜美 同
	片岡 豊	白鷗大学教授		
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授	他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、18名	
	川崎 勝			
	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授		(3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第20号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2014年3月31日 (年2回刊)
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 (有) 梅沢印刷所